

翻訳の楽しい回り道

ときどき必要に応じて翻訳をすることがあります。日本語から外国語への翻訳の場合、公式な文書は必ずネイティブにチェックをしてもらおうようにしています（このネイティブチェックに関する私独特の“秘術”を2007年4月の「気まま随想——寝ている間に仕事は進む!？」に紹介していますのでご覧になってみてください）。

外国語から日本語へ場合は、こちらが“日本語のネイティブ”なのでその必要はありませんが、そのぶん、訳文が読んだ人の心に心地よく感動的に響くかが大事になってきます。

昨年11月、地元・昭島市の稲門会(早稲田の校友の集い)の総会で、没後400年のシェイクスピアとセルバンテスについて講演しましたが、その中で翻訳についても触れました。この機会に改めて一部加筆してその部分をご紹介します。

”To be or not to be, that is the question!”

シェイクスピアの『ハムレット』は、他の3作品『リア王』『マクベス』『オセロー』の4大悲劇の中でも最も知られた作品であり、その主人公の性格や発した言葉の解釈については、長い文学史のなかで、最も論議された、最も魅力的な人物の一人でしょう。



とりわけ人口に膾炙している言葉は、第三幕第一場に出てくる”To be or not to be, that is the question!”でしょう。

英語を勉強した人だったらそれほど難しい文ではないですよ。でも奥の深い世界的な文学作品。特に前半部分をどう訳すか、明治時代以降、多くの日本人が悩んだようです。

初期の日本語訳の代表的なものは坪内逍遙訳。それは「世に在る、世に在らぬ、それが疑問ぢや」（1926年）とあります。

以来、いろいろな訳され方をしてきましたが、それらはみな次の2点に集約されるようです。

- ① 「be」の「ある（という状態）」を、どんな日本語に置き換えるか。「ある、存在する、実在する、生存する、等々」
- ② 「or not to be」の部分を、「To be」の否定語で訳すか、対語で訳すか。
つまり、「あるべきかあらざるべきか」または「生きるべきか死ぬべきか」という、2つのパターンになるという。



「ハムレット」の舞台・デンマークのクロンボー城

最も受け入れられている訳は、「生きるべきか、死ぬべきか（あるいは、「生か、死か）」それが問題だ」だと思います。中世の英語を翻訳できるような力には私にはありませんが、それでも再度、作品を読み、舞台の現場を訪れた自分としてはこの部分を次のように訳してみました。

「何が真実なのか、何が真実でないのか、それを究めるのが最重要課題である」

これは、人間対人間の葛藤の中で、正義と真実を求めて懊悩するハムレットの生命からの叫びなのです。そしてこの重い言葉は、今を生きる私たちにも、人生のあるべき生き方とは何なのか、本当の正義とは何なのか、根本的な問いを投げかけているような気がするのです。

名訳中の名(迷)訳が出てきた？

こんなくそまじめな解釈を試してみた自分ですが、講演のための参考にとネットを見ていたら、これこそ名訳中の名(迷)訳かも、と思われる訳にぶつかりました。

それは大阪弁による日本語訳です。

” To be or not to be, that is the question!”

— やったるか〜、あかんか〜、ほな〜、どないしょ〜。 —

これは、まさに紛れもない名訳です。父王の敵をとるというハムレットの深い悩みの心情を、非常によく表現できています。ネットに書かれていた訳の背景を要約してみますと：

最初の「To be」は、多くの訳者が悩んだように、どんな言葉を当てはめても構わない。たまたまそれが大阪弁で「やったるか」に落ち着いたのに過ぎない。続く「, or not to be」は、「To be」を何と訳すかに関係なく、「あかんか」という大阪弁がシックリと合う。そして、この大阪弁の名訳が名訳たる所以は、後半部分にある。

「that is the question.」は、他の和訳では、殆ど例外なく「それが問題だ」、またはその類似の言葉になっている。しかし、大阪弁では、「どないしょ〜」にした。これは、ハムレットの心情を読み取って、「that is the question.」を、「I'm at a loss what to do.」(一体どうすればよいのか途方に暮れている。)と解釈したからに他ならない。

なるほど、名訳中の名訳とも言われるゆえんでしょう。皆さまだったらどう訳されますか？

素晴らしい翻訳は原作を越えることさえあります。高校時代の国語の教科書に出てきた「ピパの詩」は英語の原作も素晴らしいですが、翻訳の素晴らしさで今も私の心に残っています。

Pippa's Song

Robert Browning

The year's at the spring
And day's at the morn;
Morning's at seven;
The hill-side's dew-pearled;
The lark's on the wing;
The snail's on the thorn;
God's in his heaven —
All's right with the world!

春の朝

上田 敏

時は春、
日は朝(あした)、
朝(あした)は七時、
片岡(かたをか)に露みちて、
揚雲雀(あげひばり)なのりいで、
蝸牛(かたつむり)枝に這(は)ひ、
神、そらに知ろしめす。
すべて世は事も無し。

日本語訳の切れ味のよさ、快活さ、瑞々しさ、そして安定感・・・暗唱していると心まで満たされ、落ち着き、爽快になってくるでしょう。

最後に、せっかくなので誰でも訳せそうな英語文に挑戦してみましょう。
もっとも身近な愛の言葉：**I love you.** これを皆さんだったらどう訳されるでしょうか。

「私はあなたを愛しています」——もちろん入試問題では正解ですね。文法的にも合っている。でも面白くない。つまらない。愛する当事者間でも、今どきはこんな硬い言葉は使わないでしょう。文学作品であればなおさらですね。すぐに思いつく言葉では：

「愛してるわ(の)」「好きよ」「好きなの」「あなたに首ったけよ」「私はあなたのものよ」「もうどうなってもいいわ」……女性側の言葉ですがまだいくらでもありますね。男性側ではもう古典的ともなったかもしれない「僕のパンツ洗ってくれますか?」「キミを食べてしまいたい」などまであるでしょう。皆さまは愛する人にどう伝えたでしょうか。

ものの本によるとロシアのツルゲネーフは、これを「死んでもいい」と訳したといえます。そしてロンドンに留学、昨年没後 100 年の夏目漱石は、これを男性側の言葉として「月がきれいですね」と訳した。これについて「あなたが月のようにきれいだ」とか「あなたと見る月がきれいだ」などと、いろんな解説が付いたようですが、つい少し前に終わったNHKの朝ドラ「とと姉ちゃん」にも出てきました。

主人公・常子に思いを寄せていた生物学好きの大学生が自分の思いを伝えるのに「月がきれいですね」と言った。それを文学好きな妹の鞠子が聞いて「それって I love you. のことなのよ」と常子に解説していたのを思い出します。

さてこの項を読んでくださった皆さま。「I love you」の日本語訳は? ——宿題です。

